

厚生労働科学研究費補助金

エイズ対策政策研究事業

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備の
ための研究

令和元年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 高田 清式

令和2（2020）年 5月

目 次

I. 総括研究報告	
ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究に関する研究	----- 1
高田清式	
II. 分担研究報告	
1. 拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研究教材の作製	----- 7
高田清式、武内 世生、末盛浩一郎、井門敬子、中村美保	
(資料) 最近知っておきたい感染症の話題	
高齢者の介護と特徴	
2. 愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査	----- 12
高田清式、末盛浩一郎、井門敬子、若松綾	
(資料) 高齢化しつつある県内のエイズ患者の現状と地域でのケア	
3. 福祉療養施設への出張研修、意見交換に関する研究	----- 17
末盛浩一郎、高田清式、井門敬子、若松綾、小野恵子	
(資料) 在宅・介護に役立つ薬の情報—抗 HIV 薬の基礎知識—	
4. 地域で実践的なポケット版小冊子の作製	----- 21
高田清式、末盛浩一郎、井門敬子、若松綾、小野恵子	
(資料) HIV 感染症の介護マニュアル (簡易版/2019年度版)	
5. 在宅介護職員の実施研修	----- 25
小野恵子、高田清式、末盛浩一郎、井門敬子、若松綾	
III. 研究成果の刊行に関する一覧表	----- 29

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）

（総括）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究

課題番号：H30-エイズ-一般-003

研究代表者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によってHIV診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和元年度の研究成果として、①拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製に着手、②愛媛県の高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会の開催および実態調査（アンケート）、③福祉療養施設への出張研修、意見交換を計7施設で医師・看護師・薬剤師・MSWのHIV診療チームとして出向し実施、④地域でHIV診療に関する実践的なポケット版小冊子の作製（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）し四国の主なHIV診療施設に配布、⑤在宅介護職員に当院でのHIV患者の実施研修（外来、病棟）を計3回実施し、地方でのHIV診療のモデルとして体制整備・充実に努めつつありさらに四国全体に広げていくことを計画している。

研究分担者

武内 世生・高知大学医学部・准教授
末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師
井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長
若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師
中村美保・高知大学医学部附属病院・看護師
小野恵子・愛媛大学医学部附属病院・総合診療サポートセンター・ソーシャルワーカー

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指

定され、累計180名以上の患者を治療している。四国地区は近年HIV・エイズ患者の増加が著しく、当県もエイズ拠点病院に指定されている病院が17施設もあるものの殆どが診療未経験であり、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者のHIV・エイズ患者が多く、HIV感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているがHIVに対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情であ

る。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前より HIV 診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべき HIV 感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。このような背景のもと、中核拠点病院の立場から、県内の病院・施設との連携整備、さらには県・市の保健行政との連携も踏まえ、HIV 感染者・エイズ患者に対する診療体制を整備し充実を図りたいと考えている。また、高齢化と患者数の増加にて同様の背景である高知県の拠点病院も研究対象として活動していく計画である。さらには、今年度には徳島県、香川県にも研究への参加を促し、ブロック拠点病院が存在しない四国地区全体の HIV/エイズ診療体制の充実に努めることを実行しつつある。

HIV 感染者・エイズ患者に対する中核拠点病院としての機能的な運用と診療体制の整備を目的に挙げ、平成 30～令和 2 年度の 3 年間で研究を行う。なお、愛媛県保健医療対策協議会（会長：村上博県医師会長）、愛媛県および高知県庁の各健康増進課、および NGO 団体 HaaT えひめ（代表：新山賢）には、一連の研究に関して、相談、意見聴取に了解のもと参加いただいた。さらにこれらの研究成果は、エイズ学会をはじめ多くの機会に公表・報告していくことで、他府県などにモデル地区として

の立場で発信し、四国のみならず全国の地域の HIV 診療の充実に努めていく。

B. 研究方法

【研究 1】拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製
愛媛県および高知県の各拠点病院の HIV に関する啓蒙、意見交換を図るために、県の行政の協力を得て HIV 診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加）や各病院にて講演会を開催し、かつ情報収集のため意見交換を行う。また、研修教材の作成に着手する。

【研究 2】愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に募集のもと参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を開催する。特に高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害（HAND）についても啓蒙するとともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことを目的に、研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護について、受け入れ時の支障などに関してアンケートを行う（参加者 100 名程度の予定）。

【研究 3】福祉療養施設への出張研修、意見交換

積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を年に数施設単位（各参加者 30～100 名程度）で行う。当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向して講義をし、かつ各

出張講義の終了時に全参加者に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行う。またこの講義の理解度・感想も確認する。なおそれらの意見を、介護用の小冊子（研究 4）にも反映させる。

【研究 4】地域で実践的ポケット版小冊子の作製

地方で HIV/エイズ患者を積極的に介護施設で分け隔てなく介護をしてもらうための試みとして、介護時の HIV 感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIV に関するポケット小冊子（18 x 10 c m 大程度の予定）を作製し県内および四国の主だった HIV 診療施設に配布する。

【研究 5】在宅介護職員の実施研修

HIV 患者の介護に直接あたってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、県内の在宅介護職の看護師に各々 1 週間ずつ研修会として、当院の HIV 患者の実施研修（外来、病棟）と講義・討議を年に数回行う。なお、拠点病院からの実施研修も併せて募集する。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C. 研究結果

【研究 1】

愛媛県および高知県の各拠点病院の HIV に関する啓蒙、意見交換を図るために、県の行政の協力を得て HIV 診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加し討論）を令和 2 年 2 月 18 日に開催した（四国の連

携のため高知県の医療スタッフも参加した）。また、徳島県、香川県の医療スタッフも参加し、四国全体でスタッフ合同会議を行った（令和元年 11 月 28 日）。さらに研修教材の作製に着手した。また、次年度に向けて四国の各県の拠点病院の看護師・ソーシャルワーカーを中心に、看護・介護に関する合同会議を行うために、綿密な打ち合わせを行った。

【研究 2】

県内の高齢者施設から現場の介護・福祉担当者に参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を令和 2 年 1 月 29 日に開催した。研修会時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行い（参加者 53 名）次回の諸資料の参考にすることとした。

【研究 3】

HIV 感染者の増加に対応するため積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を計 7 施設で行った（各参加者 12~97 名、計 259 名）。当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向した。

【研究 4】

介護時の HIV 感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIV に関するポケット冊子（18 x 10 c m 大程度）を作製し県内および四国の主な HIV 診療施設に配布した。

【研究 5】

県内の在宅介護職の看護師に各々 3 日ずつ当院の HIV 患者の実施研修（外来、病

棟)と講義・討議を計3回実施した。

D. 考察

地方における病院・介護施設間のHIV診療連携として愛媛県と高知県をモデルに、地方におけるHIV診療および介護連携に関する啓蒙とともに実態調査を行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後のHIV感染者の高齢化と介護・福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では令和元年末現在累計180名以上のHIV診療経験があり(県内の大半のHIV診療を担当)、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢のHIV感染者が多く見られHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において令和元年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、各拠点病院と長期療養患者を受け入れ得る介護・福祉施設間の連携は緊喫の課題である。今年度は、具体的に計7施設の病院・介護療養施設などへ直接出張講義をHIV診療チームとして行った。その結果、介護や福祉環境を要するHIV患者の受け入れが円滑に行い得る施設

が増加した。このように、直接に行う出張講義は積極的な連携の1方法として意義が高かったと考える。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良・開発が年々進んでいるものの、今後HIV感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われる、今後の1課題として、まず四国地区に応じた実践的な(事前評価委員からのコメント・助言も参考にし、針刺し事故時の対応方法および配備薬剤も具体的にどの病院に備わっているかなど、どの地区においても素早く対応ができるような内容も含めて)抗HIV薬および併用薬に関する資料を作製した。

なお、これらの実践的な出張研修は、エイズ学会雑誌に投稿し査読の結果、掲載され、学会報告とともに、文体として全国に発信できたことも意義深い(さらに今年度までの結果を新たにまとめ、全国への啓蒙のためエイズ学会雑誌に投稿中)。

いずれにしてもHIV患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するためのHIV感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して地方の各地域・病院においてHIV診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。また、今年度愛媛県の高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会を全県下に呼びかけて開催しHIV感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い(令和2年1月29日開催)。さらにより具体化したHIV診療体制の充実をめざし、今年度は地方で実用的な

(愛媛や四国の現況や最新の治療法、感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた) HIVに関するポケット冊子を作製・配布した。このポケット冊子に関しては、事前評価委員からも面白いという意見・評価もいただいております、今後現場での意見も聞きつつさらに改良した冊子を将来は作製したい。

また、愛媛県ならびに高知県に加え今年度は徳島県、香川県とも福祉連携体制などについて十分討議・連携ができた(令和元年11月28日)ことは四国地方全体を考える上でも有意義であった。高齢化にあたり、HIV診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修の結果等を踏まえ、さらに充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような四国地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、充足した生活が1人では送れないHIV感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要があると考える。さらになお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV診療体制整備のために高齢介護施設の介護・福祉担当者への講演会、さらに積極的に出張講義、ポケット版小冊子の配布などを行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要なHIV感染・エイズの増加に対応するために、HIV診療体制の整備は、特に地方においては拠点病院間のみならず介

護・福祉施設との福祉連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 今日の治療指針 2019年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2):256-257、2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac.2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects.
4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M, Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV関連神経認知障害(HAND)における髄液中のネオプテリン量およびHIV-RNA量と様々のART療法後の変化、第33回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019年11月
2. 若松綾、武田怜子、芝田佳香、宮崎雅

美、藤原光子、小野恵子、中尾綾、乗松真大、木村博史、末盛浩一郎、井門敬子、山岡多恵、高田清式、愛媛県における実地研修の現状、第33回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019年11月

3. 中尾綾、山之内純、末盛浩一郎、竹中克斗、高田清式、HIV陽性者に対するアオワ・ギャングリング課題とBADsとの関連、第33回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019年11月

4. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡眞一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌秀、太田康男、茂呂寛、渡邊珠代、松田昌和、重見麗、岡寄玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、中村麻子、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向、第33回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019年11月

5. 西田拓洋、中尾綾、中村美保、川田通子、海面敬、臼井麻子、池谷千恵、吉川由香、武内世生、窪田良次、尾崎修治、佐藤穰、千酌浩樹、和田秀穂、山下光、山之内純、高田清式、中国四国地方におけるHIV関連神経認知障害に関する研究一体制構築一、第33回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019年11月

6. 芝田佳香、宮崎雅美、渡辺美沙、武田玲子、若松綾、小野恵子、木原久文、末盛浩一郎、井門敬子、中尾綾、竹中克斗、

高田清式、山岡多恵、非英語圏のエイズ患者に対する看護を行った一例、第33回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019年11月

H. 知的財産権の登録状況（予定を含む）
該当なし

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
課題番号：H30-エイズ-一般-003

【分担研究1】拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、機能評価と体制整備に関する本研究によって HIV 診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和元年度の研究成果として、本研究では拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製を行った。地方での HIV 診療のモデルとして体制整備・充実に努めつつありさらに四国全体に広げていくことを計画し実行しつつある。

研究分担者

武内 世生・高知大学医学部・准教授
末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師
井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長
中村美保・高知大学医学部附属病院・看護師

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計 180 名以上の患者を治療している。四国地区は近年 HIV・エイズ患者の増加が著しく、当県もエイズ拠点病院に指定されている病院が 17 施設もあるものの殆どが診療未経験であり、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が 29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者の HIV・エイズ患者が多く、HIV 感染および合併症が進行し日常生活に差し

障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているが HIV に対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前より HIV 診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべき HIV 感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。このような背景のもと、中核拠点病院の立場から、県内の病院・施設との連携整備、さらには

県・市の保健行政との連携も踏まえ、HIV感染者・エイズ患者に対する診療体制を整備し充実を図りたいと考えている。また、高齢化と患者数の増加にて同様の背景である高知県の拠点病院も研究対象として活動していく計画である。さらには、今年度には徳島県、香川県にも研究への参加を促し、ブロック拠点病院が存在しない四国地区全体のHIV/エイズ診療体制の充実に努めることを実行していきたい。

さらにこれらの研究成果は、エイズ学会をはじめ多くの機会に公表・報告していくことで、他府県などにモデル地区としての立場で発信し、四国のみならず全国の地域のHIV診療の充実に努めたい。

B. 研究方法

拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製

愛媛県および高知県の各拠点病院のHIVに関する啓蒙、意見交換を図るために、県単位での講演会・勉強会および県の行政の協力を得てHIV診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加）や各病院にて講演会を開催し、かつ情報収集のため意見交換を行う。また、研修教材の作成に着手する。さらに、徳島県、香川県とも連携し、四国全体のHIV診療体制の充実を図る。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C. 研究結果

愛媛県の各拠点病院のHIVに関する啓蒙、意見交換を図るために、県の行政の協力を得てHIV診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加し討論）を令和2年

2月18日に開催した（四国の連携のため高知県の医療スタッフも参加した）。研修教材の作製に着手した。また、今年度は四国の各県の拠点病院の看護師・ソーシャルワーカーを中心に、看護・介護に関する合同会議を行った。また、愛媛県の南予地域の重要な拠点病院の1つである、大洲市立病院にて「最新の知っておきたい感染症」と題して、HIV感染症に関する最新の情報を織り込み令和2年3月11日に講演会を行う予定であった（コロナウイルス感染のため5月に延期、図1に抜粋を示す）。

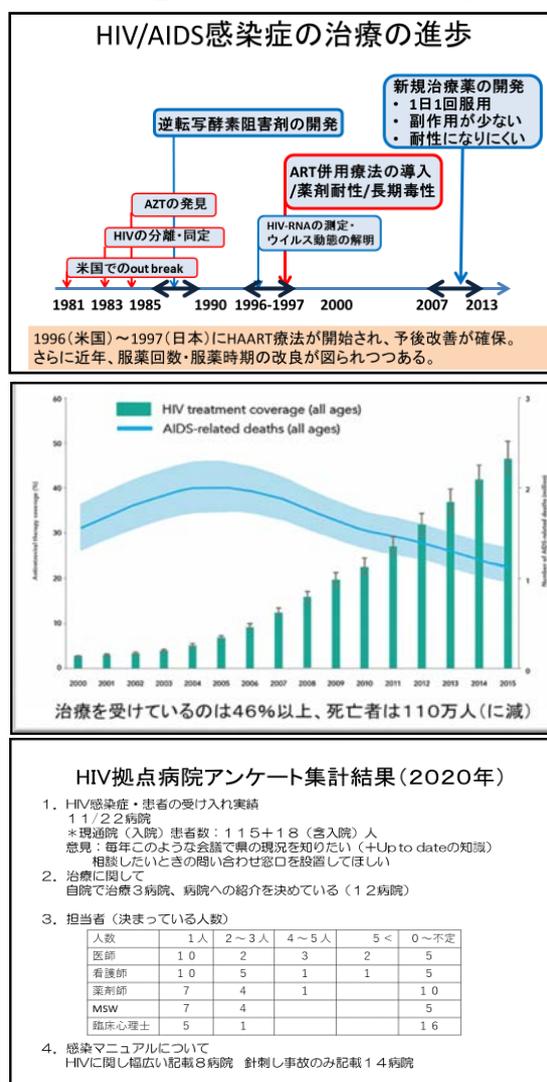
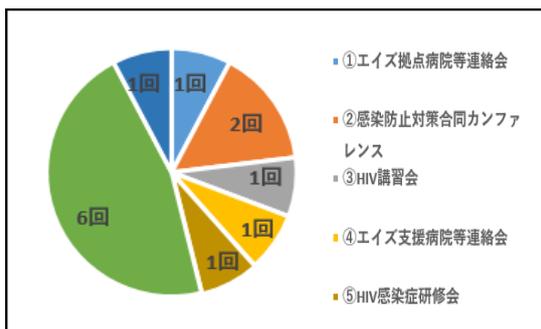


図1 講演会の資料スライド(抜粋)

さらに高知県においては、①高知県エイズ拠点病院等勉強会、②感染防止対策合同カンファレンス、③HIV講習会、④エイズ支援病院等連絡会、⑤高知県 HIV 感染症研修会、⑥出前研修（6施設）、を開催した（図2）。



<表1：事例紹介>

70歳代 男性 既婚（妻：施設入所、長男：A市在住） ケーパソン：長男
 20XX年（60歳代）
 HIV感染症と診断され、抗HIV薬内服開始。
 服薬自己管理、外来通院もできていた。
 HIVウイルスコントロールもできていた。
 20XX年+10年（70歳代）
 脳梗塞発症し入院、右半身麻痺、失語症、えん下困難あり。
 リハビリ施行し、車椅子での体位保持は可能。
 胃瘻造設後、栄養、内服薬を注入している。
 今後について：長男からは、「自分の家庭があるため、家では看れない」
 妻は施設入所しており、在宅療養は困難。
 主治医より担当MSWに転院調整を依頼。

図2 高知県での研修会（令和元年度）

研修会は事例（図2抜粋）を提示し、各参加者に問題点と解決策などを討議する形式をとり、様々な討議がなされた。さらに高知県での歯科診療連携施設を25から47施設に増加させ、HIV感染者が円滑に歯科診療を受けられる体制を充実させた。

四国全体の四国地区エイズ診療中核拠点病院HIV担当看護師会を令和元年10月19日に開催し、4県9名の看護師が参加し、各施設からの報告、課題について協議した（行政との連携、HIV専任看護師の必要性、地域医療機関との連携、各地区の研修会の現況など）。

また、今年度は看護師だけでなく医師も含めて徳島県、香川県の様々の医療スタッフも参加し、四国全体でスタッフ合同会議を行った（令和元年11月28日）。また、次年度に向けて四国の各県の拠点病院の看護師・ソーシャルワーカーを中心に、看護・介護に関する合同会議を行うために、綿密な打ち合わせを行った。

D. 考察

地方における病院・介護施設間のHIV診療連携として愛媛県と高知県をモデルに、地方におけるHIV診療および介護連携に関する啓蒙とともに実態調査を行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後のHIV感染者の高齢化と介護・福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では令和元年末現在累計180名以上のHIV診療経験があり（県内の大半のHIV診療を担当）、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢のHIV感染者が多く見られHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において令和元年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者である

という現実がある。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良・開発が年々進んでいるものの、今後 HIV 感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われ、今後の 1 課題として、まず四国地区に応じた実践的な（事前評価委員からのコメント・助言も参考にし、針刺し事故時の対応方法および配備薬剤も具体的にどの病院に備わっているかなど、どの地区においても素早く対応ができるような内容も含めて）抗 HIV 薬および併用薬に関する資料を作製した。

いずれにしても HIV 患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するための HIV 感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して地方の各地域・病院において HIV 診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。

さらに高知県での研修会のアンケート結果からも、受け入れできない理由として

「知識不足」と「不安」があることが明らかとなった。まず、知識不足に対しては、HIV 陽性者を受け入れる前に全職員に対する研修会（出前研修）を開催する事が有用で、研修内容としては、基礎知識、治療法、感染対策、曝露後の予防投与等が必要と考える。一方、不安の解消には、実際に HIV 陽性者と関わってもらう 1 日実地研修が有効であると考えられる。現場を実際に体験して正しい知識を得ることで、不安や先入観を払拭し、偏見という垣根がとれると期待できると考える。なお、研修会終了

後のアンケートで半数は「受け入れできない」と回答しているものの、受け入れに対する課題は、「受け入れできない」と回答した理由と同じであった。この結果からも、受け入れ不可と回答した施設だけでなく、受け入れ可能と回答した施設に対する教育・研修が必要と考えられる。

また、愛媛県ならびに高知県に加え今年度は徳島県、香川県とも福祉連携体制などについて十分に討議・連携ができたことは四国地方全体を考える上でも有意義であった。高齢化にあたり、HIV 診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修の結果等を踏まえ、さらに充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような四国地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、充足した生活が 1 人では送れない HIV 感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要性があると考え。さらになお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV 診療体制整備のために愛媛県及び高知県で拠点病院などへの講演会を行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要な HIV 感染・エイズの増加に対応するために、HIV 診療体制の整備は、地方においては特に各病院・施設間の連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 今日の治療指針 2019 年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2):256 -257、2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV 陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac.2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects.
4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M, Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害 (HAND) における髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と様々の ART 療法後の変化、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
2. 若松綾、武田玲子、芝田佳香、宮崎雅美、藤原光子、小野恵子、中尾綾、乗松真大、木村博史、末盛浩一郎、井門敬子、山岡多恵、高田清式、愛媛県における実地研修の現状、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

3. 中尾綾、山之内純、末盛浩一郎、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイオワ・ギャンブ リング課題と BADS との関連、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

4. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡眞一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌秀、太田康男、茂呂寛、渡邊珠代、松田昌和、重見麗、岡寄玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、中村麻子、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

5. 西田拓洋、中尾綾、中村美保、川田通子、海面敬、臼井麻子、池谷千恵、吉川由香、武内世生、窪田良次、尾崎修治、佐藤穰、千酌浩樹、和田秀穂、山下光、山之内純、高田清式、中国四国地方における HIV 関連神経認知 障害に関する研究一 体制構築一、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

6. 芝田佳香、宮崎雅美、渡辺美沙、武田玲子、若松綾、小野恵子、木原久文、末盛浩一郎、井門敬子、中尾綾、竹中克斗、高田清式、山岡多恵、非英語圏のエイズ患者に対する看護を行った一例、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

H. 知的財産権の登録状況 (予定を含む)

該当なし

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
課題番号：H30-エイズ-一般-003

【分担研究2】愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によって HIV 診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和元年度の研究成果として、愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査（アンケート）を行った。県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に募集のもと参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を継続して開催した。特に高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害（HAND）についても啓蒙した。知識啓蒙とともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことを目的に、研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行った（参加者 53 名）。地方での HIV 診療のモデルとして体制整備・充実に努めつつあるが、介護施設での実態がさらに明らかになった。

研究分担者

末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師

井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長

若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師

当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が 29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者の HIV・エイズ患者が多く、HIV 感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているが HIV に対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計 180 名以上の患者を治療している。四国地区は近年 HIV・エイズ患者の増加が著しく、当県もエイズ拠点病院に指定されている病院が 17 施設もあるものの殆どが診療未経験であり、大半の患者が

域であることを踏まえて、当院では数年前より HIV 診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべき HIV 感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。このような背景のもと、中核拠点病院の立場から、県内の病院・施設との連携整備、さらには県・市の保健行政との連携も踏まえ、HIV 感染者・エイズ患者に対する診療体制を整備し充実を図りたいと考えている。ブロック拠点病院の存在しない四国地区全体の HIV/エイズ診療体制の充実に努めることを実行していきたい。

さらにこれらの研究成果は、エイズ学会をはじめ多くの機会に公表・報告していくことで、他府県などにモデル地区としての立場で発信し、四国のみならず全国の地域での HIV 診療の充実に努めたい。

B. 研究方法

愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に募集のもと参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を開催する。特に高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害

(HAND) についても啓蒙する。知識啓蒙とともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことを目的に、研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護について、受け入れ時の支障などに関してアンケートを行う（参加 50～100 名程度）。

(倫理面への配慮)

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C. 研究結果

県内の高齢者施設から現場の介護・福祉担当者に参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を令和 2 年 1 月 29 日に開催した。研修会時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行い（参加者 53 名、図 1、2、3）、次回の諸資料の参考にすることとした。また、参加者には分担研究 4 にての成果物である、感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた HIV に関するポケット冊子（18 x 10 cm 程度）を配布した。



図 1 講演内容（一部抜粋）介護に必要な HIV の知識を講演した。

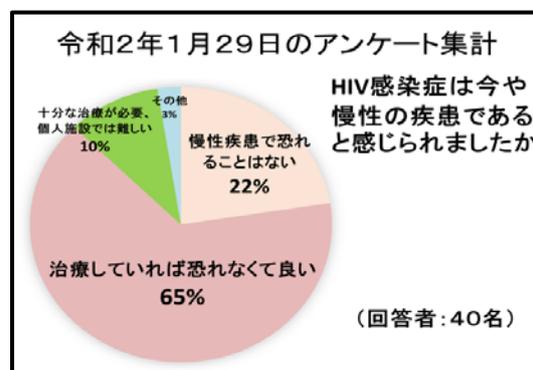


図 2 HIV 感染は慢性の疾患と感じたか

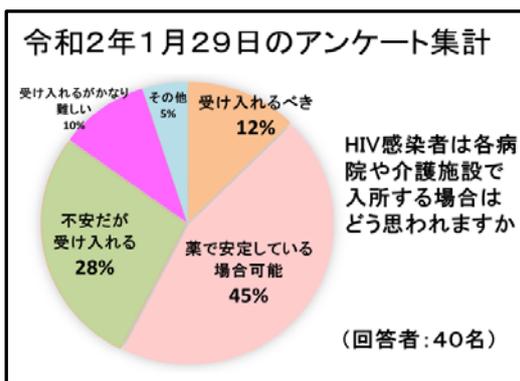


図3 HIV感染者を受け入れられるか

アンケートの内容は、①HIV感染をどう感じたか、②自分の療養型病院・介護施設への入所をどう思うか、などに関してであった。その結果（回答数40名：回収率75%）、①HIV感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない22%、治療されていれば恐れない65%で計87%が恐れ不要と感じており、当方の積極的な姿勢と啓蒙の効果もあってか比較的HIVに関し前向きに捉えてくれると考えられた（図2）。さらに、②各自の療養型病院や介護施設への入所・受け入れをどう思うかに関しては、どんな状況でも受け入れる～不安は強いが受け入れるなどのある程度意識の差はあるが、85%が施設として受け入れ可能との多くの前向きな意見を得た（図3）。

D. 考察

全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後のHIV感染者の高齢化と介護・福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では令和元年末現在累計180名以上のHIV診療経験があり（県内の大半の

HIV診療を担当）、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢のHIV感染者が多く見られHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において令和元年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、各拠点病院と長期療養患者を受け入れ得る介護・福祉施設間の連携は緊喫の課題である。今年度は、愛媛県の高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会を県自治体の協力のもと、全県下に呼びかけて開催しHIV感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い。さらに研修会後の実態調査においては、参加者の87%は「治療等が良好なら不安はない」（うち22%は治療に関係なく不安はない）および85%で「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高いと考えられた。

なお、これらの実践的な啓蒙は、エイズ学会での発表および雑誌に投稿し査読の結果、掲載され、学会報告とともに、文体として全国に発信できたことも意義深い（さらに第2報も投稿中）。

いずれにしてもHIV患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加

を抑制するための HIV 感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して地方の各高齢者福祉施設において HIV 診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。

さらになお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV 診療体制整備のために高齢介護施設の介護・福祉担当者への講演会、さらに積極的に出張講義、ポケット版小冊子の配布などを行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要な HIV 感染・エイズの増加に対応するために、HIV 診療体制の整備は、特に地方においては拠点病院間のみならず介護・福祉施設との福祉連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 今日の治療指針 2019 年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2)：256 -257、2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV 陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac.

2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects. 4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M, Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害 (HAND) における髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と様々の ART 療法後の変化、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
2. 若松綾、武田玲子、芝田佳香、宮崎雅美、藤原光子、小野恵子、中尾綾、乗松真大、木村博史、末盛浩一郎、井門敬子、山岡多恵、高田清式、愛媛県における実地研修の現状、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
3. 中尾綾、山之内純、末盛浩一郎、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイオワ・ギャンブルリング課題と BADS との関連、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
4. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡眞一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌秀、太田康男、茂呂寛、渡邊珠

代、松田昌和、重見麗、岡寄玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、中村麻子、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

5. 西田拓洋、中尾綾、中村美保、川田通子、海面敬、臼井麻子、池谷千恵、吉川由香、武内世生、窪田良次、尾崎修治、佐藤穰、千酌浩樹、和田秀穂、山下光、山之内純、高田清式、中国四国地方における HIV 関連神経認知障害に関する研究－体制構築－、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

6. 芝田佳香、宮崎雅美、渡辺美沙、武田玲子、若松綾、小野恵子、木原久文、末盛浩一郎、井門敬子、中尾綾、竹中克斗、高田清式、山岡多恵、非英語圏のエイズ患者に対する看護を行った一例、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

H. 知的財産権の登録状況（予定を含む）

該当なし

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）

（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究

課題番号：H30-エイズ-一般-003

【分担研究3】福祉療養施設への出張研修、意見交換に関する研究

研究分担者：末盛浩一郎（愛媛大学医学系研究科 特任講師）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によってHIV診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和元年度の研究成果として、福祉療養施設への出張研修、意見交換を計7施設で医師・看護師・薬剤師・MSWのHIV診療チームとして出向し実施した。この出張研修は施設への啓蒙とともにHIV患者の入所・受け入れにも繋がり、極めて意義深い研究活動と考えている。

研究分担者

高田清式・愛媛大学医学部附属病院・教授
井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長

若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師
小野恵子・愛媛大学医学部附属病院・総合診療サポートセンター・ソーシャルワーカー

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計180名以上の患者を治療している。四国地区は近年HIV・エイズ患者の増加が著しく、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者のHIV・エイズ患者が多く、HIV感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応

については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているがHIVに対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前よりHIV診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべきHIV感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。

この背景のもと、療養病院および福祉施設にて出張研修を通じてHIV診療や介護の意識改善・啓蒙に努めることを目的とし

た。また、アンケート調査等を通じ地方のHIV診療に関する連携の実態を把握し問

題点を検討する。

B. 研究方法

積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を年に数施設単位（各参加者 30～100 名程度）で行う。当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向して講義をし、かつ各出張講義の終了時に全参加者に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行う。またこの講義の理解度・感想も確認する。なおそれらの意見を、介護用の小冊子（研究 4）にも反映させる。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C. 研究結果

HIV 感染者の増加に対応するため積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を計 7 施設で行った（各参加者 12～97 名、計 259 名）。当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向した（図 1）。

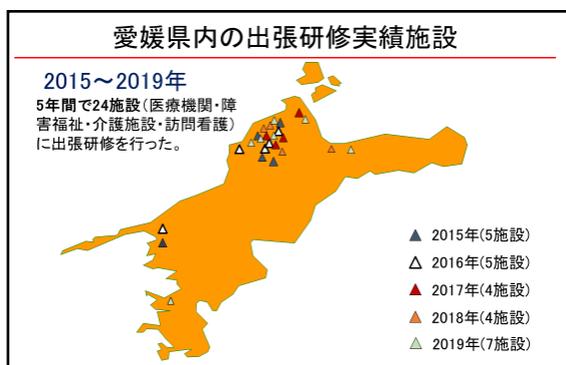


図 1 愛媛県の出張研修実績施設

なお、各出張講義の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行っ

た。主な内容は、①HIV 感染をどう感じたか、②自分の療養型病院・介護施設への入所をどう思うか、などに関してであった。その結果（回答数 171 名：回収率 99%）、①HIV 感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れ不要と感じたか 21%、治療されていれば恐れ不要と感じたか 68%で計 89%が恐れ不要と感じており、当方の積極的な姿勢と啓蒙の効果もあってか比較的 HIV に関し前向きに捉えてくれていると考えられた（図 2）。

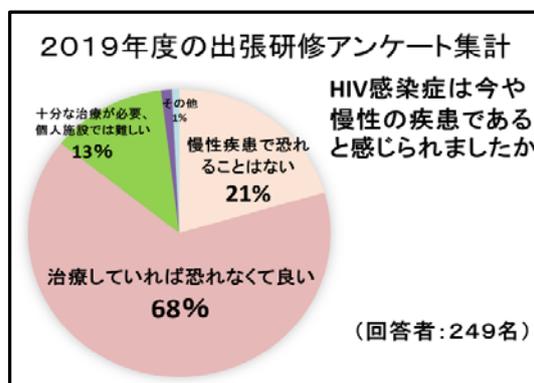


図 2 HIV 感染をどう感じたか、恐れ不要と感じたか

さらに、②各自の療養型病院や介護施設への入所・受け入れをどう思うかに関しては、どんな状況でも受け入れる～不安は強いが受け入れるなどのある程度意識の差はあるが、94%が施設として受け入れ可能との多くの前向きな意見を得た（図 3）。

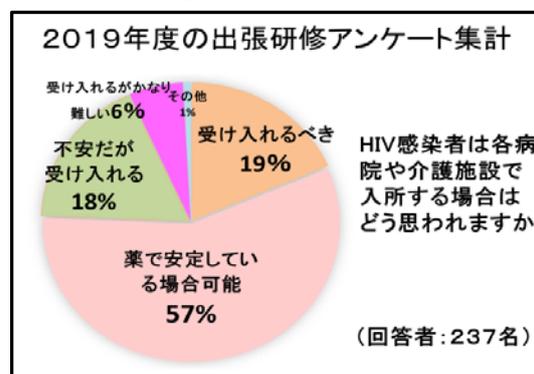


図 3 自病施設での HIV 患者の受け入れ

さらに、参加者には「在宅・介護に役立つ薬の情報—抗 HIV 薬の基礎知識」の冊子を配布し（この冊子は、各拠点病院にも配布）、最新の抗 HIV 薬の知識も得やすいように努めた。

D. 考察

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では令和元年末現在累計 180 名以上の HIV 診療経験があり（県内の大半の HIV 診療を担当）、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV 感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年 10 名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢の HIV 感染者が多く見られ HIV 診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢の HIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において令和元年末現在 50 歳以上の 8 割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、介護福祉の連携は緊喫の課題である。今年度は、具体的に計 3 施設の療養型病院・介護施設などへ直接出張講義を HIV 診療チームとして行った。今後このような活動を通じて、介護や福祉環境を要する HIV 患者の受け入れが円滑に行い得えると考えられ、直接に行う出張講義は積極的な連携の 1 方法として意義が高かいと考える。さらに、出張講義の際のアンケートで計 89%は「治療等が良好なら不安はない」（うち 21%は治療に関係なく不安はない）および 94%が「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たこ

とは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高く期待できると考えられた。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良が年々進んでいるものの、今後 HIV 感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われる今後の 1 課題と考えている。

なお、これらの実践的な出張研修は、エイズ学会雑誌に投稿し掲載され、学会報告のみでなく、文体として全国に発信することも意義深い（第 2 報も投稿中）。

地方において、充足した生活が 1 人では送れない HIV 感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要性があると考え。さらになお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV 診療体制整備のために積極的に出張講義を行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要な HIV 感染・エイズの増加に対応するために、HIV 診療体制の整備は、特に地方においては拠点病院間のみならず介護・福祉施設との福祉連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 今日の治療指針 2019 年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2):256 -257、2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV 陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac. 2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects.
4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M, Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害 (HAND) における髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と様々の ART 療法後の変化、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
2. 若松綾、武田玲子、芝田佳香、宮崎雅美、藤原光子、小野恵子、中尾綾、乗松真大、木村博史、末盛浩一郎、井門敬子、山岡多恵、高田清式、愛媛県における実地研修の現状、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
3. 中尾綾、山之内純、末盛浩一郎、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイワ・ギャンプ リング課題と BADS との関

連、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

4. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡眞一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌秀、太田康男、茂呂寛、渡邊珠代、松田昌和、重見麗、岡寄玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、中村麻子、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

5. 西田拓洋、中尾綾、中村美保、川田通子、海面敬、臼井麻子、池谷千恵、吉川由香、武内世生、窪田良次、尾崎修治、佐藤穰、千酌浩樹、和田秀穂、山下光、山之内純、高田清式、中国四国地方における HIV 関連神経認知 障害に関する研究—体制構築—、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

6. 芝田佳香、宮崎雅美、渡辺美沙、武田玲子、若松綾、小野恵子、木原久文、末盛浩一郎、井門敬子、中尾綾、竹中克斗、高田清式、山岡多恵、非英語圏のエイズ患者に対する看護を行った一例、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

H. 知的財産権の登録状況 (予定を含む)

該当なし

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）

（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究

課題番号：H30-エイズ-一般-003

【分担研究4】地域で実践的なポケット版小冊子の作製

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によってHIV診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。この背景のもと、療養病院および福祉施設に簡便にHIVに関するマニュアルが手元にあることが知識の確認や啓蒙につながると考え、ポケット版の介護マニュアルの発行を考えた。令和元年度の研究成果として、地域でHIV診療に関する実践的なポケット版小冊子の作製（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）し四国の主なHIV診療施設および介護および福祉施設に配布を行った。これらの施設ではハンディで判りやすいと概ね好評であった。

研究分担者

末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師

井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長

若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師

小野恵子・愛媛大学医学部附属病院・総合診療サポートセンター・ソーシャルワーカー

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計180名以上の患者を治療している。四国地区は近年HIV・エイズ患者の増加が著しく、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者のHIV・エイズ患者が多く、HIV感染およ

び合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているがHIVに対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前よりHIV診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべきHIV感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への

啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。

この背景のもと、療養病院および福祉施設に簡便に HIV に関するマニュアルが手元にあることが知識の確認や啓蒙につながると考え、ポケット版の介護マニュアルの発行を考えた。

B. 研究方法

介護時の HIV 感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名等具体的に刷り入れた）HIV に関するポケット版マニュアル（18 x 10 cm 大程度の予定）を作製し県内および四国の主だった HIV 診療施設に配布した。また、各出張講義の全参加者にこの介護用のポケット版マニュアルを配布し感想や意見を聴取し次回の介護用の小冊子の改訂版にも反映させる。

このポケット冊子に関しては、事前評価委員からも面白いという意見・評価もいただいており、今後現場での意見も聞きつつさらに改良した冊子を将来は作製したい。（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C. 研究結果

介護時の HIV 感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名等具体的に刷り入れた）HIV に関するポケット版マニュアル冊子（18 x 10 cm 大程度）を作製し県内および四国の主だった HIV 診療施設

に配布した（図）。



図 HIV 介護マニュアルポケット版

D. 考察

令和元年度の研究成果として、地域で HIV 診療に関する実践的なポケット版小冊

子の作製（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）し四国の主な HIV 診療施設および介護および福祉施設に配布を行った。これらの施設ではハンディで判りやすいと概ね好評であった。

地方において、充足した生活が1人では送れない HIV 感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要があると考える。その参考としてこのポケット版マニュアルが多少でも役立つことを期待している。

E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV 診療体制整備として、介護および福祉施設の充実を目的に、HIV 感染症に関する介護用マニュアルを作製した。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 今日の治療指針 2019 年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2)：256 -257、2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV 陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac.2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects.
4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M, Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large

abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害 (HAND) における髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と様々の ART 療法後の変化、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
2. 若松綾、武田玲子、芝田佳香、宮崎雅美、藤原光子、小野恵子、中尾綾、乗松真大、木村博史、末盛浩一郎、井門敬子、山岡多恵、高田清式、愛媛県における実地研修の現状、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
3. 中尾綾、山之内純、末盛浩一郎、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイオワ・ギャンブ リング課題と BADS との関連、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
4. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡眞一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌秀、太田康男、茂呂寛、渡邊珠代、松田昌和、重見麗、岡寄玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、中村麻子、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性

HIV-1 の動向、第 33 回日本エイズ学会・
学術総会、熊本、2019 年 11 月

5. 西田拓洋、中尾綾、中村美保、川田通
子、海面敬、臼井麻子、池谷千恵、吉川
由香、武内世生、窪田良次、尾崎修治、
佐藤穰、千酌浩樹、和田秀穂、山下光、
山之内純、高田清式、中国四国地方におけ
る HIV 関連神経認知 障害に関する研究－
体制構築－、第 33 回日本エイズ学会・学
術総会、熊本、2019 年 11 月

6. 芝田佳香、宮崎雅美、渡辺美沙、武田
玲子、若松綾、小野恵子、木原久文、末盛
浩一郎、井門敬子、中尾綾、竹中克斗、
高田清式、山岡多恵、非英語圏のエイズ患
者に対する看護を 行った一例、第 33 回日
本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年
11 月

H. 知的財産権の登録状況（予定を含む）

該当なし

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）

（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究

課題番号：H30-エイズ-一般-003

【分担研究5】在宅介護職員の実施研修

研究分担者：小野恵子

（愛媛大学医学部附属病院 総合診療サポートセンター・ソーシャルワーカー）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によってHIV診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和元年度の研究成果として、3回実施したが、HIV患者の介護に直接当たってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、県内の在宅介護職の看護師に各々1週間ずつ研修会として、当院のHIV患者の実施研修（外来、病棟）と講義・討議を行った。具体的な研修により、HIV感染症に関する啓蒙とともにHIV患者の在宅医療の推進にも繋がり、極めて意義深い研究活動と考えている。

研究分担者

高田清式・愛媛大学医学部附属病院・教授
末盛浩一郎（愛媛大学医学系研究科・特任講師）

井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長

若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計180名以上の患者を治療している。四国地区は近年HIV・エイズ患者の増加が著しく、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者のHIV・エイズ患者が多く、HIV感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著

しく在宅の長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で自立した生活が困難な長期療養患者の対応については、HIVに対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。この実情のもと、具体的な研修を行い、HIV感染症に関する啓蒙とともにHIV患者の在宅医療の推進にも繋げて行くことを目的とした、極めて意義深い研究活動と考えている。

また、アンケート調査等を通じ地方のHIV診療に関する連携の実態を把握し問題点を検討する。

B. 研究方法

HIV患者の介護に直接当たってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、県内の在宅介護職の看護師に各々1週間ずつ研修会として、当院のHIV患者の実施研

修（外来、病棟）と講義・討議を年に数回行った。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C. 研究結果

令和元年度には3回実施した。HIV患者の介護に直接当たってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、県内の在宅介護職の看護師に各々3日間ずつ研修会として、当院のHIV患者の実施研修（外来、病棟）と講義・討議を行った（図）。

日時	1日目	2日目	3日目
9:00	オープニング 《会場別》		
9:30	HIV/HIV/AIDSの医学的基礎	患者と医療 1-1 医療従事者 研修会第1 《会場:在宅研修部1-1研修室》	1MDC見学/ 医療ナース・ケア・科員 研修、地域ナースの連携 《中野MDC、在宅研修センター》
10:00	医師 講演: HIV/AIDSについて 《本館3階MDC在宅研修センター》		
10:30	医師 講演: HIV/AIDSについて 《本館3階MDC在宅研修センター》		
11:00	在宅見学 《高田診療、在宅研修部》	HIV患者の診療と連携 在宅研修部 講演会 HIV感染性疾患の生活と社会 HIV感染性疾患の臨床と在宅 「地域との連携」MDC	心療士講演 《中野MDC、在宅研修センター》
11:30			
12:00		昼休憩	昼休憩
12:30			
13:00	昼休憩		
13:30	在宅見学 《高田診療、在宅研修部》	1-1 研修室/外来見学 《本館3階MDC、在宅研修部》	
14:00			医師 講演 《本館3階MDC、在宅研修部、在宅研修センター》
14:30	看護 講演: 在宅 研修-在宅医療 《高田診療、在宅研修部》 在宅研修センター	医師 講演: 在宅研修の現状と在宅医療 性感染症 《高田診療》 在宅研修センター	
15:00			
15:30			
16:00		施設見学: 研修室 《本館3階MDC、在宅研修センター》	医師 講演 《本館3階MDC、在宅研修センター》
16:30			
17:00	HIV/AIDSのディスカッション 《会場別》	1日振り返り	

図 在宅介護研修スケジュール

計6名の研修を行ったが、アンケートを行ったところ研修の全体的には全員満足度は高かった。

具体的意見として、外来見学では、「普通に外来に来られており、直接話しをさせてもらった。たいへん貴重な体験であった。ここでまだ自分の中にあった偏見に気付くことができた。通院が不規則になっている理由など個々に知りたいと思った。」などの意見があった。

病棟実習では、「エイズ発症し重症になったときにどのように接するかの実際を学ぶことができた。衛生材料の取り扱いについて具体的に汚染処理室などの見学もさせていただき勉強になった。」などの意見があった。

さらに講義、カンファレンスも含め全体的な意見として「最新の知識が得られた。チーム医療で1人の患者に対して多職種の立場の意見交換の実際が見られた。患者の全体像が見られた。他職種で同じ事を共有することが重要であり実際参加することができ様子や雰囲気を感じることができた。チームの雰囲気関係性が良くチーム皆が一つの目標に向かって頑張っている気持ちが良く伝わり私自身も背中を押してもらったように思う。現状を知ることができて良かった。近い将来、在宅の連携が重要になることが実感でき、受け入れる立場で学べて良かった。今後この疾患は在宅医療・看護がさらに必要になってくるので、これからも勉強を続けたい。」という前向きな意見も多くあり、HIVの介護・在宅医療の充実がさらに図れた。

D. 考察

令和元年度の研究成果として、3回実施したが（計6名受け入れ）、HIV患者の介護に直接当たってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、県内の在宅介護職の看護師に各々3日間ずつ研修会として、当院のHIV患者の実施研修（外来、病棟）と講義・討議を行うことができた。具体的な研修により、HIV感染症に関する啓蒙とともにHIV患者の在宅医療への推進にも繋がり、極めて意義深い研究活動と考え

ている。アンケートの結果、かなり前向きで好意的な意見も多く見受けられ、HIV 感染症に対する偏見や誤解が解け、さらに最新の知識が得られる良い機会と考えられた。さらに近々具体的な患者の在宅医療への受け入れが円滑に進むことを期待している。

E. 結論

在宅介護職の看護師に対し、実施研修を3回実施した。HIV 患者の介護に直接当たってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、県内の在宅介護職の看護師に各々3日間ずつ研修会として、当院のHIV 患者の実施研修（外来、病棟）と講義・討議を行った。具体的な研修により、HIV 感染症に関する啓蒙とともに HIV 患者の在宅医療への推進にも繋がり、極めて意義深い研究活動と考えている。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 今日の治療指針 2019 年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2):256 -257、2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV 陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac.2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects.
4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M,

Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害 (HAND) における髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と様々の ART 療法後の変化、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
2. 若松綾、武田玲子、芝田佳香、宮崎雅美、藤原光子、小野恵子、中尾綾、乗松真大、木村博史、末盛浩一郎、井門敬子、山岡多恵、高田清式、愛媛県における実地研修の現状、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
3. 中尾綾、山之内純、末盛浩一郎、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイオワ・ギャンブ リング課題と BADS との関連、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
4. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡眞一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌秀、太田康男、茂呂寛、渡邊珠代、松田昌和、重見麗、岡寄玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、中村麻子、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、

藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、
国内新規 HIV/AIDS 診断症例における 薬
剤耐性 HIV-1 の動向、第 33 回日本エイズ
学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

5. 西田拓洋、中尾綾、中村美保、川田通
子、海面敬、臼井麻子、池谷千恵、吉川
由香、武内世生、窪田良次、尾崎修治、
佐藤穰、千酌浩樹、和田秀穂、山下光、
山之内純、高田清式、中国四国地方におけ
る HIV 関連神経認知 障害に関する研究－
体制構築－、第 33 回日本エイズ学会・学
術総会、熊本、2019 年 11 月

6. 芝田佳香、宮崎雅美、渡辺美沙、武田
玲子、若松綾、小野恵子、木原久文、末盛
浩一郎、井門敬子、中尾綾、竹中克斗、
高田清式、山岡多恵、非英語圏のエイズ患
者に対する看護を 行った一例、第 33 回日
本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年
11 月

H. 知的財産権の登録状況（予定を含む）

該当なし

研究成果の刊行に関する一覧表

1. 今日の治療指針 2019 年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2):256 -257, 2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV 陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac. 2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects.
4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M, Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

令和 2年 5月 / 日

厚生労働大臣
(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
(国立保健医療科学院長)

機関名 国立大学法人 愛媛大学

所属研究機関長 職名 医学系研究科長

氏名 山下 政克



次の職員の令和 年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策政策研究事業)
- 研究課題名 ブロック拠点のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
- 研究者名 (所属部局・職名) 国立大学法人 愛媛大学医学部附属病院 教授
(氏名・フリガナ) 高田 清式 (タカダ キヨノリ)

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	愛媛大学	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

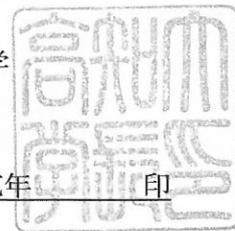
(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。



令和 2 年 3 月 26 日

厚生労働大臣
—(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
—(国立保健医療科学院長)—

機関名 高知大学
所属研究機関長 職名 学長
氏名 櫻井 克年 印



次の職員の令和元年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策政策研究事業)
- 研究課題名 ブロック拠点のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
- 研究者名 (所属部局・職名) 国立大学法人高知大学医学部附属病院総合診療部・准教授
(氏名・フリガナ) 武内 世生・タケウチ セイショウ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	高知大学医学部倫理委員会	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和 2年 5月 | 日

厚生労働大臣
(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
(国立保健医療科学院長)

機関名 国立大学法人 愛媛大学

所属研究機関長 職名 医学系研究科長

氏名 山下 政克



次の職員の令和 年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策政策研究事業)
- 研究課題名 ブロック拠点のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
- 研究者名 (所属部局・職名) 国立大学法人 愛媛大学大学院医学研究科 特任講師
(氏名・フリガナ) 末盛 浩一郎 (スエモリ コウイチロウ)

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	愛媛大学	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和 2年 5月 | 日

厚生労働大臣
（国立医薬品食品衛生研究所長） 殿
（国立保健医療科学院長）

機関名 国立大学法人 愛媛大学
所属研究機関長 職名 医学系研究科長
氏名 山下 政克



次の職員の令和 年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
- 研究課題名 ブロック拠点のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
- 研究者名 （所属部局・職名） 国立大学法人愛媛大学医学部附属病院 薬剤部 副部長
（氏名・フリガナ） 井門 敬子 （イド ケイコ）

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入（※1）		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査（※2）
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針（※3）	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	愛媛大学	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること （指針の名称：)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

（※1）当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他（特記事項）

（※2）未審査に場合は、その理由を記載すること。

（※3）廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> （無の場合はその理由：)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> （無の場合は委託先機関：)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> （無の場合はその理由：)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> （有の場合はその内容：)

（留意事項） ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和 2年 5月 1日

厚生労働大臣
-(国立医薬品食品衛生研究所長)- 殿
-(国立保健医療科学院長)-

機関名 国立大学法人 愛媛大学

所属研究機関長 職名 医学系研究科長

氏名 山下 政克



次の職員の令和 年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策政策研究事業)
- 研究課題名 ブロック拠点のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
- 研究者名 (所属部局・職名) 国立大学法人愛媛大学医学部附属病院総合診療サポートセンター 看護師
(氏名・フリガナ) 若松 綾 (ワカマツ アヤ)

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	愛媛大学	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。



令和 2 年 3 月 26 日

厚生労働大臣
—(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
—(国立保健医療科学院長)—

機関名 高知大学
所属研究機関長 職名 学長
氏名 櫻井 克年 印



次の職員の令和元年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策政策研究事業)
- 研究課題名 ブロック拠点のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
- 研究者名 (所属部局・職名) 国立大学法人高知大学医学部附属病院総合診療部・看護師
(氏名・フリガナ) 中村 美保・ナカムラ ミホ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	高知大学医学部倫理委員会	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和 2年 5月 | 日

厚生労働大臣
-(国立医薬品食品衛生研究所長)- 殿
-(国立保健医療科学院長)-

機関名 国立大学法人 愛媛大学

所属研究機関長 職名 医学系研究科長

氏名 山下 政克



次の職員の令和 年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策政策研究事業)
- 研究課題名 ブロック拠点のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究
- 研究者名 (所属部局・職名) 国立大学法人愛媛大学医学部附属病院総合診療サポートセンター 社会福祉士
(氏名・フリガナ) 小野 恵子 (オノ ケイコ)

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	愛媛大学	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。